

ミュージアム・コレクション論(1)

KANAYAMA, Yoshiaki / 金山, 喜昭

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

49

(終了ページ / End Page)

68

(発行年 / Year)

2011-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007389>

ミュージアム・コレクション論（１）

法政大学キャリアデザイン学部教授 金山 喜昭

本稿はスザンナ・キーン著“Fragments of the world: Uses of Museum Collections”⁽¹⁾を基に、そこで述べられる博物館のコレクション論を注解する。本稿の構成は、まず本書の中心テーマとなる第１章の２項目について要訳をする。次に＜補説＞ではキーンの論考に沿いながら、筆者による英国での調査から日本の博物館（本稿では美術館を含めて博物館と総称する）の実情などを検証する。

なお、私が本書を取り上げる理由は、2008年度に英国のUCL（University College London）にて在外研究員として１年にわたり英国内の博物館のコレクション・マネメントについて著者から指導を受けたことによる。著者は、UCLの考古学研究所にて考古資料の保存管理学でPhDを取得し、ウィンチェスターの調査研究センターのコンサヴェイター、ロンドン博物館（the Museum of London）の保存管理部長、ロンドン科学博物館（the Science Museum）のコレクション管理部長を経て2001年よりUCL考古学研究センターの教官として博物館・文化財（Museums and Heritage Studies）を担当する。

キーンによると、本書の目的は、展示されることのない博物館の膨大なコレクションの現状を評価して改善・正当化するための基礎を築くことにある。キーンはイギリスのコレクション問題に詳しいが、この問題は必ずしも英国に限らず世界中のどこの地域でも当てはまることから他国の多くの事例も取り上げている。コレクションが博物館の新しい方向性にとって大きな焦点になりうることを示している。

1. 活用されることのない博物館コレクション問題

キーンは、本書の冒頭で次のように問題を提起している。

「資料は展示物の交換に使うのだと思っているのですか」

「人々が来て、資料に取り組んでいるのは研究調査のためですか」

「展示することができないのに、なぜコレクションを所有しているんですか」

「コレクションを活用しなければ、はそれを評価してくれるような個人のオーナーに譲ってはいかがですか」

博物館の収蔵コレクションを扱っている者は、このような質問をよく耳にする。しかし、それらに対する納得のいく回答はほとんど返ってこないといつてよい。現在、多くの博物館はその活動の中心をコレクションの管理から教育普及へと移している。そのためにコレクションの明確な意義は全くなってしまおうという大きな問題が生じている。

博物館で働いた経験のない人は、展示物以外に収蔵しているコレクションがあるということをよく認識していない。先のような質問を投げかけるのはステークホルダーや博物館に資金援助を行う人たちである。彼らはコレクションが活用されているかどうかを明確に理解していない。これについて博物館の運営者は、この種の問題に取り組むのをためらっている。なぜなら、その反応によってはコレクションの処分が求められるかもしれないと恐れているからだ。事実、ほとんどの博物館が、展示されている量の十倍以上の資料を保有しているのである。

コレクションには、地域博物館や専門博物館が保有する数百の収蔵品から、ロンドンの自然史博物館の7000万点の標本のように膨大な数量まである。価値ある物の集合（アセンブリッジ）というコレクションの考え方は、ほとんど普遍的だと言ってよい。コレクションにそのような内包する価値があるにも関わらず、その価値を失うことなく活用するにはどうしたら良いか、という点についての一般的見解はまだ示されていない。

事実、決して展示される事のないコレクションを、なぜ保管し続けなければ

ならないのかという疑問に対して、十分な説得力のある答えはいまだに出されていない。むしろコレクションは貴重な文化的遺産、社会の物的記録、研究調査の基礎、知の生成物、他の機関への貸し出しのために存在しているという正当化が可能ではある。しかし著者の経験や公共性の考え方からいえば、多くのコレクションは、今でもほとんど活用されていないといってよい。

経済的論議が支配的になっている今日の状況において、博物館では職員を雇用し、来館者の集客を行い、購買の品として様々な商品を提供している。他方、コレクションはどんな明確な経済的利益をも生み出していないのである。文化的な価値も本質的に重要ではあるが、財政負担に応分するだけの説得力に欠くという意見が出ている。

またコレクションについては、博物館の側が展示することができないような物を膨大に収集することを決定し、そのような資源に対して利用者側が表明しているニーズに応えずに需要を一方的に決めてしまっているという批判がある。そのような批判に対して博物館が適切に対応しているとはいえない。

したがって、コレクションの目的を再検討することである。この問題は、博物館が公共の福祉にきちっと貢献すべきだとの政治的要請から、英国、アメリカ、カナダ等の幾つかの国々で話題になっている。文化的な利益を測るのは、よく知られているように困難だからだ。コレクションから経済的収益を得ようとするのは容易なことではない。しかし、経済的な機能という点に関心が向けられている現実についても避けて通ることはできない。

<補説>

① コレクション管理から教育・学習に重点をシフトする

キーンは近年の英国の博物館の動向について、従来のコレクションの管理を重視していたものから教育にシフトしているという。その背景には、1988年に保守党のサッチャー政権下で実施された教育改革がある。その中心はナショナル・カリキュラムを導入して教育内容を全国画一化したことだ。その後の労働党のブレア政権でもナショナル・カリキュラムは踏襲された。しかしブレア政権は、サッチャー政権のように新自由主義や市場原理をとらずに、またかつての企業国有化・福祉国家でもない「第三の道」を政治理念とした。なかでもコ

52 法政大学キャリアデザイン学部紀要第8号

コミュニティを強調して社会的弱者に対する識字率や学力の向上などに力を入れた⁽²⁾。博物館政策にもそれは反映された。1997年の『共通の富～博物館と学習～』⁽³⁾（1997年に国家遺産省 Department of National Heritage. は文化・メディア・スポーツ省 Department of Culture, Media and Sports. に改組）には博物館を公共サービス機関とし、教育はあらゆる活動の本質となること、博物館の活動の中核に“教育”を置くことを明確に示した。2001年10月に英国政府の外郭のリソースと呼ばれる団体（Resource, the Council for Museums, Archives and Libraries）による報告書『地域のルネッサンス：イングランドのミュージアムの新しい展望』⁽⁴⁾が出された。本報告書には、英国の博物館のミッションや価値を再確認したうえで、これまでの地域の博物館の現状と問題点を認識して、博物館を新しく再生させていくための具体的な取り組みが提示されている。博物館の社会的な役割や貢献については、＜教育と学習＞とともに＜アクセスとインクルージョン＞、＜経済の活性化＞、＜学習意欲や創造に資するコレクション＞、＜サービスの卓越性と質の確保＞などがあげられている。

特に＜教育と学習＞について、専門委員会は次の通り達成すべき目標を設定している。博物館のリソースを学習や教育にアクセスする件数を増加させること、博物館がもつ広範なリソースを活用したサービスを提供する、博物館を利用することで教師のスキルアップをはかる、博物館が学習センターになる、学校授業の教材に実物資料を活用するということに具体的である⁽⁵⁾。＜教育と学習＞とは、学校教育への支援ばかりでなく、生涯学習でも可能性を探求し、興味や楽しさから学ぶことも射程に入れている。

その施策は地方博物館にまもなく波及した。例えばイングランドの東南部のピータバラ市（Peterborough）（人口約14万人）のピータバラ博物館の事例をみよう⁽⁶⁾。英国の地域博物館の大半は歴史的な建造物を活用している。ここも同じである。建物は1816年に建てられたスクイアー・コークという判事の邸宅であったが、彼の死後は診療所に転用されて第一世界大戦では多数の傷病兵が収容された。今でも戦死者の幽霊が館内の階段の吹き抜けに出るといわれているほど古風な感じがする。その後の1931年に公立博物館として開館した。常設展は地域の通史や自然史展示である。各展示コーナーに子ども用のハンズオン・コーナー（触れる展示）や、塗り絵や各時代の衣装を着る体験コーナーが

用意されている。私が訪れた日には、ロビンフットの仮装をした来館者サービス担当者が館内を巡回していた。彼は展示品を説明し、来館者からの相談や質問に対応する。あるいは世間話をしても何でもよい。要は来館者とのコミュニケーションをとることが彼の役割である。特別展は「犯罪と刑罰」(2008年7月12日～11月9日)というもので、会場では模擬裁判をしていた。来館者サービス担当者が判事に扮して親子連れや子どもたちが参加して、被告人に対して弁護士と検事から双方の主張を出し合い、それを判事が判決をくだすという筋書きである。館内の各所に教育効果を高めるための工夫が見られ、楽しく学ぶことができるようになっている。館内のカフェで休憩していると、小学生の少女が「この博物館は私の一番好きなところ」だと話していた。ここは1998年には英国博物館協会から「最優秀教育賞」を受賞している。

日本でも似たような動向があった。1984年、第二次中曽根内閣のもとに設置した臨時教育審議会が「個性重視の原則」「生涯学習体系への移行」「国際化、情報化など変化への対応」などの21世紀を見据えた新自由主義による教育改革の方向を打ち出した。1989年3月に文部省は学習指導要領を改訂したが、そこには個性を活かす教育のために、小学校や中学校の社会科では博物館の活用が推奨された。1998年12月に改訂された学習指導要領(2004年4月施行)は、それまでの学習指導要領をさらに発展化させたもので「総合的な学習の時間」の導入と週5日制を採用した。「総合的な学習の時間」は、子どもたちの「生きる力」を育成するために、学校側が自由な授業をする裁量ができるようになった。また自由時間の増加は家族や地域での学びの機会を提供するものであった。小学校の社会科では「博物館や郷土資料館等の活用を図るとともに、身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの観察や調査を行うようにすること」、中学校の美術の教科では「美術館・博物館等の施設や文化財などを積極的に活用する」というように、学校と博物館の連携がはかられることになった。校外学習として博物館に対する学校からの需要は大いに高まった。

日本博物館協会の調査によれば、図1に示すように、1997年以来、資料の収集・保存などコレクション管理に力を入れている博物館が減り続けている。それに代わり展示や教育普及に力を入れるところが増えている⁽⁷⁾。

その背景として、学校が「総合的な学習の時間」を開始して博物館を利用す

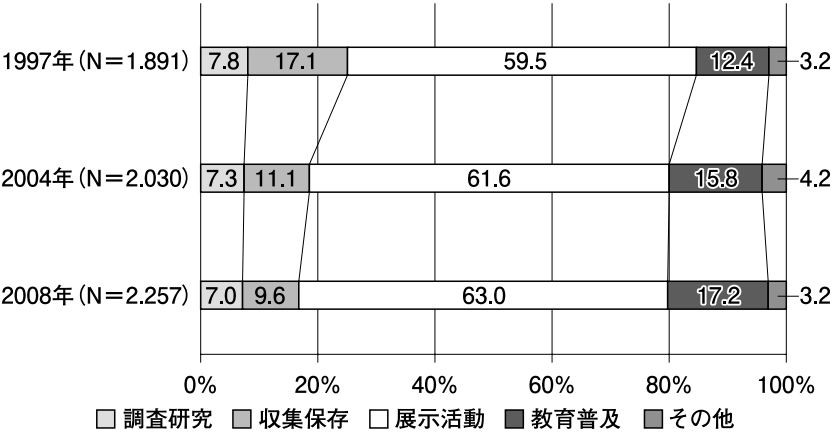


図1 博物館が一番力を入れている活動

2009年「日本の博物館総合調査研究報告書」p. 47より引用

る機会が増えた。博物館はそれに対応するために教育普及の人員を配置することや、新しい事業を立ち上げるようになった。特に自然史や理工系博物館は顕著で、逆に美術館の教育普及は弱い。また、博物館の入館者数の減少傾向に歯止めをかけるために、展示のリニューアルや、特別展や企画展の回数を増やすなどの措置をとるようになったことも、コレクション管理が手薄になっている理由であろう。

文部科学省の社会教育調査⁽⁸⁾によると、1992年の総入館者数は約1億3千4百万人、1995年1億2千4百万人、1998年1億1千3百万人のように減少したが、2004年には1億1千7百万人と微増している。これは入館者を増やすために展示や教育普及に業務をシフトしたことの表れなのかもしれない。キーンの指摘のように、このように日本でも博物館業務の主体はコレクションの管理から教育普及にシフトしていることを確認することができる。

② コレクション・マネジメントとは

コレクションの管理運営は博物館の基礎的な機能である。コレクション・マネジメントとは、資料を収集して整理保管し情報を蓄積するドキュメンテーション⁽⁹⁾のことをいう。具体的には資料の受け入れや登録作業、館外からの資

料の借用や自館の資料を貸し出すことや、コレクションの目録作成や情報へのアクセス手段を確保することである。また収蔵庫内の資料の配架と移動管理も日常的な仕事である。資料をすぐに見つけることができること、一定期間以上にわたり配架されている資料を移動する場合は、すみやかに目録情報を更新して資料の位置情報を記録しておき、スタッフ同士がそのことを共有しておくようにする。また保管場所の物理・環境上の安全性、展示環境の安全性、所蔵資料の記録を定期的に点検する。コレクション・マネジメントは博物館が博物館であるための基本的な仕事である。

ここで留意しておきたいことは、英国は日本と比べて業務の分担が明確に分かれていることである。日本の学芸員は、資料の収集、整理・保管、調査・研究、展示や教育普及など全般的な業務を行う。英国は地方都市の公立博物館でもキュイレーター、コレクション・マネジャー、教育担当者などの業務が区分されている。日本でも国・公立の一部の博物館はそうであるが、まだ少数な事例でしかない。

先述したピータバラ博物館のスタッフは館長以下、考古学担当キュイレーター（2人）、教育普及担当者（2人）、コレクション・マネジャー（3人）、展示デザイナー（2人）、来館者サービス担当者（10人）となっている。コレクションの管理や運営には3人の専門職員が配置されている。教育普及担当者は学校対応をする。館内の来館者サービスは来館者サービス担当者の役割となっている。英国はコレクション・マネジャーがいることでコレクションの管理が安定的・継続的に行われている。しかし日本は専属の担当者が不在であるために、教育へのシフトは資料整理や管理の業務の停滞化に直結する問題となっている。

2008年の日本博物館協会による全国の博物館総合調査⁽¹⁰⁾によると、館蔵品のほとんど全ての資料を資料台帳に記載している博物館は、回答のあった2257館中53%の1200館ほどでしかない。このことは日本の博物館の半数ほどしかコレクションを財産としてきちんと台帳に登録していないことを意味する。公立博物館のコレクションは公的な資産である。しかし、このような実態は資産管理のうえで問題だ。登録をしていなければ、そもそも館のコレクションとはみなすことができない。こうした物は収蔵庫以外のスペースに仮置きされている

56 法政大学キャリアデザイン学部紀要第8号

場合が多い。バックヤードの廊下や部屋、あるいは学校の空き教室などに置かれている。資産として認定していないものを、公費をつかって収蔵管理していることになるからだ。

そのことは収蔵庫がいっぱいで新たな資料を収蔵することができないことと表裏一体のようである。2257館のうち収蔵庫内がほぼ満杯の状態や、入りきらない事例は47%である。1060館ほどになる。公立博物館でもほぼ同じ割合である。無回答の館が11%あることから、必ずしも整合するわけではないだろう。しかし、約半数の博物館が収蔵庫に入らない資料を保有していることも明らかだ。仮置き状態の物は、ドキュメンテーションの手続きを経ていないので、調査研究にも使えず、ましてや展示や教育普及にも活用できない、つまり死蔵品でしかない。

それでは、なぜコレクションを資料台帳に登録することに支障が生じているのだろうか。まず職員数が不足しているという問題がある。登録博物館の学芸員の平均は3.3人となっている⁽¹¹⁾。学芸員は、先述したピータバラ博物館の全ての担当者の業務をこなさなければならない。限られた人数や時間の中で、展示（特別展や企画展など）やイベント関連や学校対応（教育普及）を優先させて資料整理を後回しにする。

また資料を台帳に登録することは優先的な作業になっておらず、そのため博物館評価でも重要な項目として認められていない。公立博物館では議会や本庁の担当部局は入館者数を主要な評価にすることから、博物館は来館者を呼び込むための事業を優先することになる。学芸員が資料整理のために専従できる時間は極めて限られる。臨時職員やボランティアなどの補助員を配置できなければ、なかなか資料整理をすることができないというのが現状である。

③ 博物館が所蔵するコレクション点数の実態

博物館が他の文化・教育施設と区別される特徴は、博物館はコレクションを保有するということだ。コレクションは基礎資源である。博物館の歴史はコレクションを形成してきた歴史だといってもよい。

コレクションは展示品が中心だと思われがちだが、実はほんの一部でしかなく収蔵庫には膨大な資料が保管されている。

大英博物館は、王立学士院院長であった医学者のハンス・スローン卿（1660－1753）から遺贈された6万点以上の古美術、メダル、コイン、動植物標本などがコレクションの母体になり1753年に設立された。ロゼッタ・ストーンやパルテノン神殿の大理石彫刻、クニドスのデメテルなどの代表的なコレクションは19世紀前半までに収集されたものである。その後もメソポタミアのウル、オーレル・スタイン卿によるシルクロードの発掘品など多くが収集されて、今日では700万点以上のコレクションを所蔵する。

大英博物館に先立つ70年ほど前の1683年に最初の公共博物館としてオックスフォード大学のアッシュモolean博物館が開館した。そのコレクションは、トラデスカント父子が収集した好奇品のキャビネット（ロンドンのLambethに立地）に起源をもつ。その後コレクションはエリアス・アッシュモール（1617－1692）に引き継がれてオックスフォード大学に寄贈された。彼の博物館に対するミッションとは、世界中の人たちに研究、楽しみ、創造をはかることを目的にしてコレクションの有効な活用をはかることであった。今日でも展示室（Treasure room）には父親のジョン・トラデスカント（1638年没）が収集した17世紀のアメリカ大陸のバージニア原住民の部族長用のマントルが展示されている⁽¹²⁾。これは開館時に公開したものである。同じくオックスフォード大学のピット・リバース博物館は、軍人であつ考古・民族学者のピット・リバース（1827－1900）が収集した2万点以上の民族コレクションが母体になっている。その後も支援者からの寄贈や遺贈、購入、野外調査で採集するなど収集を継続して現在のコレクションは50万点ほどにおよぶ。

コレクションを実際に展示公開する点数は全体のほんの一部でしかない。マンチェスター大学附属のマンチェスター博物館は442万点のコレクションを所有する。その内訳は、自然資料（植物学、地質学、動物学など）は423万5千点、人文資料（考古学、人類学、エジプト学など）は18万5千点。そのうちの5,520点を展示公開しているが、その他は収蔵庫に保管されている。公開品は全体の僅か0.12%で、残りの99.88%は収蔵庫内にある⁽¹³⁾。

日本では1872年（明治5）に文部省博物局による湯島聖堂大成殿で開催された「博覧会」に遡る。それが東京国立博物館の起源となっている。常設の展示施設をもつ博物館になるのは3年後の1875年の（内務省）山下門内博物館に

58 法政大学キャリアデザイン学部紀要第8号

なってからである。大英博物館の開館からおよそ120年後のことだ。現在の東京国立博物館のコレクションは約11万件。そのうち展示品は約3000件といわれる。展示品は総コレクションの3%である。コレクションは明治時代以来、個人や団体から寄贈されたものである。実業家の高島菊次郎（1875－1969）の中国書画、建築家・実業家で横川グループ創業者の横川民輔（1864－1945）の中国陶磁のほか、実業家・政治家の松方幸次郎（1866－1950）の約8000点の浮世絵コレクションも母体の一つとなっている。1878年（明治11）に法隆寺から皇室に献納された法隆寺献納宝物は宮内省が管轄していたが、1947年に博物館のコレクションに追加された。

東京大学総合研究博物館では約250万点のコレクションを所蔵する。それらを含めて大学全体には600万点のコレクションを保有するといわれる⁽¹⁴⁾。コレクションは大学の歴史でもある。東京大学は1877年（明治10）4月に法理文学部と医学部が発足した。コレクションには、その前身の東京開成学校や東京医学校などが所蔵していた学術標本や、明治初期に来日した御雇外国人の教師が母国から持参した学術標本などがある。大学と関わりをもつ篤志家からの寄贈や交換もある。例えば安田保善社総代二代目の安田善次郎の古札コレクションなどがある。交換にはエドワード・S・モースの出身地である米国のセーラムのピーボディ博物館から寄せられた人類学関連の標本群などもある。大学のコレクションとして最も学術的価値の高いものは学内の教官・研究者・学生が国内外の調査や研究試作などによって収集したものである。調査による収集活動は継続している。コレクションは今後も増加し続ける。

④ コレクションをめぐる費用負担

これまで日本ではコレクションの保管に経費がかかるという議論がほとんどされることがなかった。公開するあてのないコレクションは不要なのか。公開しないのになぜ保管するのか。ミュージアムがコレクションを保有する根本的なテーマである。

最近、博物館資料の保管に費用負担が発生していることが一般に知られるようになった。2010年4月、政府民主党の行政刷新会議の事業仕分けで独立法人国立科学博物館が保管している、戦後初の純国産旅客機YS-11の年間の整

備・保管費用が11年にわたり毎年約900万円かかっていることが明らかにされた。機体は羽田空港の格納庫に保管されている。仕分けに立ち会った国会議員は現状維持のままで公開などの準備や予定がないことを疑問視した⁽¹⁵⁾。これはそのまま本稿の冒頭に示したステークホルダーからの疑問と同じである。

YS-11の事例は、本館から離れた格納庫に収蔵していたことから費用負担が数字に表れたから分かりやすかった。しかしほとんどの事例は博物館本館内の収蔵庫にしまわれたままで保管費用が表面にでることはない。

それでは試みにコレクションの保管経費を見積もることにする。仮に民間の貸倉庫業者に、コンテナ (2.86 m³) 一台分の空間に収蔵する資料を空調完備の貸倉庫に1カ月預けたとしたら、その賃料は1カ月6,800円である。ある政令指定都市の博物館の総床面積は約2万m²だが、そのうち収蔵庫は2,243m²。収蔵庫内の天井高5mとすると空間は11,215m³となる。そのうち通路や上部は空間として残されるので仮に3分の1を収蔵に有効な空間だとすると3,700m³である。すると1カ月879万円。年間にすると1億548万円になる。実際の博物館ではこれに資料管理をする職員の人件費や、防虫やカビの発生を予防するための措置をとる経費などが加わる。実はコレクションの保管は無料ではなく、これだけの費用負担が生じているのだ。

また市民は、博物館の職員が収集するコレクションについて何ら関与できないということも事実である。公立博物館の運営費は市民の税金で賄われている。それにもかかわらず館長や学芸員の専門家がコレクション・ポリシーにそって資料購入する。しかしコレクション・ポリシーは収集方針を示すものでしかなく、具体的に何をどれくらい集めるかについては個人的な意向や判断が働く。

他方、市民はコレクション収集にさほどの関心をもたず、コレクションの実態が明らかにされなくとも不思議に思わない。学芸員が独断的に資料を収集している背景には、市民の無関心が一因にありそうである。

あるいは借用や寄託品は博物館のコレクションではないのに、活用されずに長期間にわたり収蔵しているという事例もある。これらの所有権は所有者に帰属する。博物館は借用者や預かり者である。要するに人の所有物を無料で保管したままになっているのだ。国内の各地の博物館にこのような事例が少なから

ずある。場合によっては、寄託書や借用書の取り交わしを更新せずに放置したままになっていることもある。こうなると法令遵守違反である。

いずれにしても、コレクションを保管することは、収蔵施設の建設費、ランニングコスト（空調、電気代など）、専門職員の雇用などの費用が発生する。まずはコレクションを保有する是非を議論する前に、それだけの経費を負担していることを確認しておく。

2. 明らかにされた問題点

博物館では、展示されることのないコレクションの存在を正当化するために、しっかりとした基盤が必要だと広く認識されている。しかし国ごとに事情は異なる。博物館数が少なく、小規模のコレクションしかもたない国では問題意識は希薄である。英国には多くの博物館が膨大なコレクションを所有している。ルーマニアやスカンジナビアのように、コレクションを収蔵庫に単にしまい込んでいるような事例もある。アルゼンチンでは、1990年代中頃に収蔵庫にしまいこまれている美術作品に対する問題意識が持ち上がり、博物館はコレクションへのアクセスが重要だと認識するようになった。考古学資料も人々の関心を引きやすい。オーストラリアや英国などの様々な国では膨大な量の発掘資料の取り扱いが問題になっている。

英国では、21世紀初めに二人の研究者が「コレクション」というテーマを取り上げている。ジュリアン・スボルディング（Julian Spalding）の『詩情博物館』（The poetic museum）ではこの問題に触れている。スボルディングは、博物館にとってコレクションは魅力的で根本的な存在であると述べている。彼は、コレクションを資源として管理運営することを専門にしたコレクションセンターに収蔵することを求めている。彼が主な活用方法として考えているのは資料を貸し出すことである。彼がグラスゴウの美術館・博物館の館長であった時には「オープン・ミュージアム・プロジェクト」を立ち上げ、コレクションの活用を増大させる革新的な方法を打ち出した。

もう一人のケイス・サムソン（Keith Thomson）は『地上の宝』（Treasures on earth）の中で、博物館のコレクションは増加するほど手の届くものではなく、恩恵は少なくなると論じている。彼が問題だとするのは、資金に関わ

る事である。「ミュージアムは＜作る＞ことのできない製品を持ち（コレクションの保存管理に金がかかること）、また、来館者からは金銭を得ることがない（つまりコレクションへのアクセスは無料であることが期待されている）。博物館とは、十分な資金をもたないサービス業だ」としている。

しかし、著者のキーンは、博物館はより多くの資金を期待するよりも、コレクションへのアクセスに対する需要の喚起とその利益をいかに生み出していくかについて、より良い考えを持つことが必要であると述べている。

2001年に英国内では、『Renaissance in the regions（地方の再生）』という報告書によって、国内の地域博物館の資金繰りと成果に関する問題が提起された。それによればコレクションが活用される機会はあまりにも少なく、特に20世紀の資料についてはほとんど収集が行われていないことが指摘された。同報告書では、コレクションを教育や学習、デザインや創造行為に活用する可能性については楽観的であった。しかし、より多くの資金がなければ、顕著な改善は難しいだろうとの見解が示された。

一方、オランダでは1991年に始ったデルタ計画（Delta Plan）は、公的なコレクションを国の文化遺産の一部として有効に保存しよう、という関心に対する回答の一つであった。国家事業には資金が提供され、包括的な一覧表を作成し、国家にとって重要な資料、地域にとって重要な資料、もしくは全く重要性を欠く物というようなランク付けをした。その後1999年と2003年には、オランダ教育文化科学省によって政策宣言が出され、博物館のコレクションの幅広い活用が呼びかけられた。その目的は「Collectie Nederland（オランダのコレクション）」を形成することである。また、合理化を実行すること、これはすなわちコレクションの一部をより適切な持ち主へと譲渡・分散させることにある。

<補説>

① コレクション問題に対する国家間の対応のばらつき

英国の博物館関係者がコレクション問題に関心をもつようになったのは近年のことである。英国内の博物館は3000館ほどあるといわれる。1980年代以前の博物館は閑散としていたが、政府は博物館を＜教育・学習＞機関として見直し

62 法政大学キャリアデザイン学部紀要第8号

をはかってきた。今では博物館は市民生活にとって人気の場となっている。コレクション問題は、その過程で浮き彫りになってきた新たな課題である。キーンは、コレクション問題は国家のミュージアム数やコレクション数によると指摘するが、むしろ博物館の成熟度によるものではないだろうか。日本の博物館は英国よりも多く5000館以上もある。世界でも有数の博物館国家である。しかしコレクション管理についての問題はほとんど未着手だからだ。

キーンは、膨大な量の考古学の発掘資料の問題についても留意している。日本でも、埋蔵文化財といわれる行政発掘によって掘り出された出土品の保管のあり方が問題になっている。1997年に文化庁が報告した⁽¹⁶⁾ところによると、当時、全国の地方公共団体で保管している出土品は約459万箱（1箱は60cm×40cm×15cmのプラスチックコンテナ箱）にのぼる。毎年30万箱が増加しているという。その保管施設は恒常的保管施設（鉄筋・鉄骨、軽量プレハブ、木造など）と本来は別目的の施設を一時的に転用した仮置き施設である。そのうち213万箱（約47%）は前者に保管されているが、残りの約246万箱（約53%）は後者で、このうちの約197万箱が軽量プレハブやテントなどに保管されている。このなかには屋外に野積みになっている約15万箱も含まれている。また、全体の約40%は未整理となっているので、遺跡から掘り出してからほとんど手つかずの状態のまま保管施設に置かれていることも明らかにされた。報告書から10年以上が経っているが、相変らず発掘品は増加し続けている。

② ミュージアム・アソシエーションによるコレクション問題への取り組み

英国博物館協会（Museum Association）は1889年に創設された独立の公益法人として英国の博物館運営について指導的な役割をもつ。同協会は、『Renaissance in the regions（地方の再生）』よりも踏み込んで、2005年に『Collections for the Future（未来に資するコレクション）』⁽¹⁷⁾という報告書を刊行した。ここから英国博物館の最近のコレクション政策についての考え方を知ることができる。それによれば、公立博物館では大部分の収蔵コレクションが死蔵化されていることを正面から問題視することで、その活用化を促進することと、今後もコレクションを充実化させていくためには資料の処分も不可欠であることが述べられている。その理由は、博物館は自らの可能性や責任を公共の

ために果たす義務があるという。換言すれば、市民からの税金で運営していることに対する説明責任を果たすべきだという主張である。収蔵コレクションの活用については、収蔵庫の公開、他の博物館や学校への貸し出し、地域コミュニティへの提供などをあげている。資料処分は、博物館の専門家が決定するもので常に倫理的な責任や危険性がつきものだとしながらも、使用する見通しのないものを保管し続けることは経済的にも大きな損失である。処分の理由としては、出所や由来の不明品、脈絡不明品、損傷などのために修復が不可能なものなどとなっている。

③ 収蔵コレクションへのアクセスをどのように保証するか

英国博物館協会は、先の報告書の中で、コレクションの活用化にむけて研究者との連携をはかるとしたが、2008年10月にキーンは英国内（イングランドとウェールズ）の博物館・美術館での収蔵コレクション公開の実態調査の報告書を刊行した⁽¹⁸⁾。その要旨は次の通りである。

- ・ 回答のあった222館の博物館のうち、収蔵コレクションの公開に積極的な博物館は13%であることが判明した。回答のあったうち20%の博物館では年間400人以上の利用者がある。最も多い例は14,000人のアクセス者数を報告している。
 - ・ 222館の博物館のうち、74%の博物館では収蔵コレクションが十分に活用されていないことを認めている。しかし大部分の博物館ではコレクションに対するアクセスの要求が高まっており、逆に要求が低下している博物館は僅か7館にとどまる。
 - ・ コレクションの利用に関する大半の目的は資料調査のためとしているが、教育、社会福祉、自己実現、創作活動、楽しさのためにも利用されている。
 - ・ 実際、コレクションへの関わり方は様々である。不特定多数やグループ訪問から個人や研究者に至るまで幅広く対応している。
- 報告者のキーンの主張は次の通りである。
- ・ 博物館は、コレクションが公共の財産であることを認識すべきである。したがって、博物館はそれらを公共に役立てる義務と責任がある。実際に、市民要求としてコレクションへのアクセスの要求は高まっている。

64 法政大学キャリアデザイン学部紀要第8号

- ・博物館は積極的にコレクションの活用について広報をすべきである。
- ・博物館は、コレクション情報をオンラインや、何らかの手段で公表すべきである。
- ・博物館は利用者に、コレクションの活用の仕方を例示すべきである。
- ・博物館の認証基準に、コレクションへのアクセスや利用をベンチマーク（指標）に加えるべきである。

④ 収蔵コレクション公開の現状

英国では収蔵コレクションの公開が開始されてまもないが、いくつかの先進的な事例を紹介する。ヨーク市のヨークシャー博物館（Yorkshire Museum）は、考古学・地質・古生物を専門にする市立博物館であるが、主任キュレーターのアンドリュー・モリソン（Andrew Morrison）によれば、全ての収蔵コレクションは一般公開する方針である。公開の形態は、約1時間の収蔵庫内のツアー、市民の資料調査、ハンズオン・コーナーの設置などである。ツアーはキュレーターの案内によるもので、15人までの人数制限を設けている。一般市民のほかに職業団体によるものもあり、これまでに美容師や食肉業者などの見学もあったという。資料調査は、これまでは研究者を対象にしてきたものだが、一般市民にも開放している。

このようなコレクションの公開は博物館にとってどのような効果をもたらすのだろうか。モリソンによれば、市民がコレクションに興味をもつことでボランティアを希望する人が増えた。考古学分野だけで50人の市民がボランティアに登録するようになった。次に、美容師の人たちは、ローマ時代の髪飾りを調べて、当時の知識や技術を現代の美容に活用しようと挑戦した。つまりコレクションは職業者にインスピレーションを与えることで、彼らの技能の発達形成に役立っているという。さらに、子どもたちが将来の職業としてキュレーターなどの博物館職員を希望することにも貢献するだろうという。

UCLの実態調査では、大学博物館では収蔵コレクションの公開が積極的であることも報告されている。UCLの動物学・比較解剖学博物館（Grant Museum of Zoology and Comparative Anatomy）では、展示室のテーブル上でコレクションの閲覧ができる。

また、博物館とは別の施設で、コレクションの管理や公開を専門に行う「コレクションセンター」というタイプもある。ロンドン博物館 (Museum of London) は、本館から2マイルほど離れた地点に考古学関係のコレクションを収蔵するロンドン考古学アーカイブ調査センター (The London Archive and Research Centre) を設置している。ここには、1907年以来発掘した5500以上にのぼるロンドン市内遺跡の考古資料や記録類の文書を所蔵している。7人のスタッフはコレクションの管理や調査以外にも、市民、博物館関係者、専門家などにコレクションを公開し、学校や地域へのアウトリーチ活動などを担当している。

スタッフの一人でアシスタント・キュレーターのダン・ネビット (Dan Ne-bitt) によれば、ここは誰でも事前に申し込みをすれば、自由に資料の閲覧や調査ができるし、市民や学校のグループ見学も受け入れている。2007年の利用者は7,968人にも達しているが、その大部分はアウトリーチによる利用者である。収蔵庫の利用者は、1ヶ月間に一般の大人33人、子ども12人、専門家61人となっている⁽¹⁹⁾。博物館ではホームページ上で市民の利用を積極的に呼びかけている⁽²⁰⁾。

ノーウィッジ城教育センター (Norwich Castle Study Centre) は、英国の中で最も積極的にコレクションを公開している機関の一つである。建物は元裁判所を利用して2004年から公開を開始した。センターは、博物館に隣接している。所蔵コレクションは、考古学、歴史、アート、自然史の約150万点を収蔵するが、全て公開している。

キュレーターのルース・バーウッド (Ruth Burwood) によれば、利用者は、資料整理をするボランティアのほかに、学校生徒や大学生、一般市民などによる見学、ハンズオン、調査などである。ボランティアは所蔵資料の整理作業を行うが、考古学や自然史などの分野ごとのスタディールームで作業をする。例えば、考古学のボランティアは資料の登録、実測、写真撮影、データの入力作業などをする。また、小中学生たちは資料に触れたりスケッチをすることや、一般市民は資料調査をする。最近では市内の大学でゲーム・デザインを専攻する学生たちが、鳥類の剥製標本を調査して作品制作に応用したという⁽²¹⁾。

もう一つは、収蔵庫を展示スペースとしても活用しているタイプがある。こ

66 法政大学キャリアデザイン学部紀要第8号

ここでは収蔵庫内にキャプションを用意して来館者に開放している。ウィールド・ダウンランド（Weald & Downland）野外博物館はその一例である。ここは13世紀から19世紀のサセックス州の民家を50棟ほど移築して保存公開しているが、建物の部材、生活用具、生業道具などのコレクションを多数所蔵している。収蔵庫内は、資料にまつわる所有者やその住まいについてキャプションや写真を使って解説している。

日本では、これまで収蔵庫は博物館の中でも聖域的な扱いがなされてきたといえる。先述したように収蔵庫がコレクションで満杯になっている博物館は多く放置されているところが少なくない。博物館に必要な資料が見つかって、収蔵スペースがないために収集することを断念しているのが実情であろう。

また、収蔵庫を市民に開放するという考え方については岩手県立博物館の収蔵庫ツアーなどのように僅かにやられているようであるが、ほとんど聞かない。国立九州歴史博物館は、バックヤードのツアーで廊下のガラス窓を通して収蔵庫の様子を見ることができる。しかし、英国のように、市民がコレクションを利用することはできない。今後、市民が収蔵コレクションを活用できるようにしていくことが、日本の博物館運営の課題になろう。

[注]

- (1) Suzanne Keene (2005). *Fragments of the World : Uses of Museum Collections*. Elsevier. pp.1-5.
- (2) 吉田多美子 (2005.11) 「イギリスの教育改革の変遷—ナショナルカリキュラムを中心に—」 レファレンス平成17年11月号、pp. 99-112.
- (3) Media and Sport Committee Great Britain(1999). *A Common Wealth : Museum in the Learning Age*. P.159.
- (4) Resource (2001). *Renaissance in the Region: a new vision for England's museums*. (<http://www.museumsassociation.org>)
- (5) Resource (2001).pp.40.
- (6) 現地調査 (2008. 8. 24)
- (7) 財団法人日本博物館協会 (2009. 3) 『日本の博物館総合調査研究報告書』 (文部科学省委託事業)、pp47.
- (8) 文部科学省 平成17年度社会教育調査。 http://www.mext.go.jp/b_menu/

toukei/001/004/h17/002.htm

- (9) Margaret Harrison & Gordon McKenna. Documentation: a practical guide. Collections Trust. P.56.
- (10) 財団法人日本博物館協会 (2009. 3) 『日本の博物館総合調査研究報告書』 (文部科学省委託事業)、pp. 85.
- (11) 文部科学省 平成17年度社会教育調査。
- (12) 現地調査 (2009. 8. 25)
- (13) Malcom Chapman(2009) “Promoting Stored Collections” Open up: Stored collections as a public resource, Museum Association, London)
- (14) 西田嘉章 (1997) 「学問のアルケオロジー」『学問のアルケオロジー』 pp 13-17、東京大学
- (15) 朝日新聞 (2101. 7. 31) <http://www.asahi.com/national/update/0731/TKY201007310157.html>
- (16) 埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会 (1997. 2) 「出土品の取り扱いについて (報告)」文化庁
- (17) Museum Association (2005). Collection for the Future.
- (18) Suzanne Keene (2008). Collection for People: Museum’s Stored Collections as a Public Resource. UCL Institute of Archaeology. P.84.
- (19) 現地調査 (2009. 9. 1)
- (20) <http://www.museumoflondonarchaeology.org.uk/English/ArchiveResearch/VisitArchive/>
- (21) 現地調査 (2008. 12. 12)

(なお、本稿は2009年度の本学学術補助金の調査研究活動成果の一部である)

ABSTRACT

Museum Collections (1)

Yoshiaki KANAYAMA

This report deals with the issue of management of the collections of museums. Dr. Suzanne Keene took out the book titled ‘Fragment of the World: Uses of Museum Collections’ which dealt with the problems of the British museum’s collection management. Based on the book, I argue by the problem of the Japanese collection management. The following questions are nominated for the opening section of the book.

‘I suppose you use the objects to change the things in the exhibitions?’

‘I suppose people come and work on the objects for research?’

‘Why do you have collections when you can’t display them?’

‘Why don’t you let some of the collections go to private owners who will appropriate them, then?’

Firstly, it is that the staffs of museums reform consciousness. The director of many museums came across this problem as indifference. Secondly, it is to open up the information about the collection which museums hold to answer these questions. And it is that people can access collection.